

《寄稿》

抜き差しならない、僕とポーランド

霜田千代磨

2015年7月19日より30日迄、世界伝統空手道連盟のプレジデントのボーデック・クウェチンスキ氏と息子のヴィテックと、クラコフ大学を中心に二千名に空手道の指導をしている師範、パウエルの三名が来日、前半5日間同伴した。今回、来日の目的は伝統空手道の師範西山先生(米国、ロスアンジェルス在)が亡くなられた後、日本人の師範が不在だった為「心・技・体」のそろった人格者を彼等に紹介する為であった。

本年「全日本空手道連合会」(日本最大の空手道組織)に小生の大学空手道部先輩で空手道のプロ野上修一氏が六代目会長に就任された。吾々一行は、九州うきは市



吉井町の道場を表敬訪問した。又、福岡より、6月ポーランドのスタラア・ヴェシで行はれた世界大会でお目にかかっている、神野勝師範(日本空手道協会)も同道された。

その後、7月23日より25日迄、北海道に滞在、2000年以来15年ぶりに吾が家を訪問された。札幌では弟英磨が大倉山ジャンプ台を案内してくれた。

1972年、冬季オリンピックでポーランドのフォルトナ選手が111メートルの記録で金メダルをとった年である。この年の9月に小生がポーランド・ウッチ市へ留学した年でもあった。それがポーランド伝統空手道発足の原点でもある。二、三年前にポーランド伝統空手道「40周年記念誌」の表紙見開きに、微笑して型を演武している40年前の我身が居た。これこそ正に腐れ縁と呼ぶべきものであろう。

2016年10月クラコフ市で世界伝統空手道連盟の世界大会が準備されており「武道会議」も計画されています。心して英語、ポーランド語を勉強しなければと考えています。(しもだ・ちよまる)

写真：博多祇園山笠にて(左から)神野師範、パウエル、筆者、ヴィテック、ボーデック、英磨

『ポーランド語辞典』の頃の思い出 (1)

小原 雅俊



イヴァシュキェヴィッチの短編集を出そうではないか、と木村彰一先生(1915-1986)が言われたのは、週に一度白水社に詰めて日本で最初のポ和辞典『白水社 ポーランド語辞典』の編纂が終わりに近づいていた頃だったろうか。その日の作業を終えて、これも恒例になっていた飲み屋へと向かう途中でなかったことだけは確かだ。神保町界隈を白水社に向かって歩いていたのをよく覚えているからだ。「君、最近は一日一冊、アガサ・クリスティーを原書で読んでいるんだがね、愉快ですな、クリスティーは」——そう言ったのも、今にもぶつかりそうに行き交うグリーンネ・アレーの通行人の間を縫ってのそんな散策の時のことだった。あの時一緒に木村先生の言葉に頷いていたのは誰だったろうか。多分、木村先生の教え子に相応しく、今なおよく飲

み、よく食べ、旺盛な研究に意欲を燃やしている(とは言え、スラヴの小言語の研究者に割かれた日本の大学のパイはあまりにも小さい)当時の若きTだったろうか。木村先生が東大を定年退官し、早稲田大学に移ったあとの教え子のひとりだから、あれはもつと後の出来事だったろうか。

木村先生から学んだこと

—学問と、赤提灯から豪華ホテルのバーまで—

私にとっての木村先生は大学の恩師と言うわけではない。『白水社 ポーランド語辞典』に監修者としての名こそ挙げられていないが、古典文献学を修め、あの木村謹治の息子としてドイツ語に通曉し、博友社の『ロシア語辞典』の中心的編者でもあった木村先生を抜きにこの辞書はあり得なかった。六